

部長	理事	課員	担当者

## 議事録要旨

会議名	第5回芦原温泉駅まちづくりデザイン部会
日時	令和元年8月30日(金) 19:30~21:30
場所	中央公民館 多目的ホール
出席者	<p>&lt;部会員&gt;            市民/笹原修之(部会長)、高木めぐみ、西田幸男、八木康史            福井工業大学/川島洋一(教授)            (一社)あわらし観光協会/津田香由紀            あわらし文化協議会/堀田あけみ            花咲ふくい農業協同組合/唯内 努            花咲ふくい農業協同組合/山口利志実            芦原温泉旅館協同組合/山口賢司            農家カフェ/藤井和代</p> <p>&lt;事務局&gt;            新幹線まちづくり課/永井理事、翠補佐、赤神主任            商工労働課/中島補佐            観光振興課/堀江課長、細川補佐、杉本主事</p> <p>&lt;オブザーバー&gt;            あわらし/佐々木市長            (株)木下設計/木下貴之、片山雅哉            (株)コム計画研究所/鈴木奈緒子</p>
欠席者	<p>&lt;部会員&gt;            市民/森嗣一朗            あわらし商工会青年部/松川秀仁            音泉組/青柳淳一            あわらしコミュ/圓道千鶴子            ゲンキッズステーション ASOVIVA!/長田康秀</p>
内容	<p>1 開会            2 部会長あいさつ  <u>部会長:</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・部会の回数を重ねるごとに、芦原温泉駅前がどのような形になるのか具体的に想像できるようになってきた。</li> <li>・昨日おととい、北九州市小倉に視察を兼ねて行った際に、まちづくりで頑張っている人の話を聞いた。小倉は人口が40万人以上で、大きな商店街や観光スポットもあり、これ以上何を頑張る必要があるのかと思うような立派なまちだが、その人は商店街の中の</li> </ul>

ビルが空きビルになっていることを危惧して、リノベーションなどを行って奮闘している。大きなまちだから放っておいても大丈夫ということではなくて、ましてやあわらのような小さなまちを放っておいたらどうなるのかと危機感が強まった。あわらでまちおこしをしているメンバーはいつも同じメンバーといった感じがして、裾野を広げることの難しさをひしひしと感じている。市民が根を張って活動すれば耐えられるということを念頭に、新幹線開業までの3年間、危機感を持って取り組んでいきたいと思う。

- ・駅前広場ひとつにしても、賑わいホールは誰が使っていくのか、魅力体感施設は誰をターゲットにするのかなど、パートごとに考えることが多くて一筋縄ではいかない。それぞれに時間をかけて会議を行って議論を深めているが、いざ完成したときに後悔がないようにしたいと思っている。
- ・これまでも申し上げてきたが、評論家で終わらずに、公式の場で責任を持って発言するからには完成した後にも是非関わっていただきたいと思っている。こうした方がみんなが使いやすいのではないかというよりは、自分が使うんだったらこうしてもらわないと困るというくらいの気持ちで臨んでほしい。
- ・本日は、川島先生から他のまちづくり事例等を教授いただくことになっている。狭い世界の中での意見ではよりよいものにならないと思うので、私たち自身が勉強して成長して知識・見識を深めることで、今後につなげたいと思うので、よろしく願いしたい。

### 3 協議事項

#### (1) 西口駅前広場の平面計画について

##### 事務局：

- ・前回の部会からの修正事項を事務局より説明させていただく。ホール、広場、控室や倉庫等の使われ方や備品などについては、ほぼ意見を集約できたものと思っているので、本日の意見をもって最終とし、基本設計を仕上げていきたいためご了承をお願いしたい。

##### 事務局：

- ・配付資料の平面図を基に、前回からの修正事項を説明する。

##### (修正事項)

- ・前面道路と広場で 80 cm の段差が生じていることについて、賑わいホール東側（在来線駅舎側）に階段を設けて解消している。よって、市道 105 号線の歩道から賑わいホールまではほぼフラットとなる。
- ・飲食・物販店舗について、前は歩道付近まで建物が張り出していたが、自由通路から雨に当たらずに賑わいホールまで行けるように通路を設けた。
- ・賑わいホールの面積を約 70 m<sup>2</sup> 広げて、賑わい広場の面積を約 265 m<sup>2</sup> 狭めた。そうすることで、基本的には賑わいホール内でイベント等を行えるようにしたいと考えている。
- ・ホール南側にあった自販機・ロッカーを、通路（ふるさと回廊）内に置く予定である。
- ・2階の打合室をフリースペースに変更し、演者控室としても使えるようにしている。
- ・配付資料の賑わいホール活用レイアウト案について、平常時、ステージイベント、マルシェ・フリーマーケットなど、一例を提示している。資料に記載した大きなイベントの際には、ホールと広場を両方使って行うようなことも想定しているが、基本的には季節

を通じてホール内でイベントができるとよいと思っている。

オブザーバー：

- ・レイアウト案は、あくまで一例だが、おおよそ部会員の皆さんからいただいた意見を反映できていると思う。

事務局：

- ・ただ今の説明を受けて、部会員の皆さんからご意見をお願いしたい。

部会員：

- ・賑わいホールと賑わい広場の合計面積が、前回から大分小さくなっているが、ガラススクリーンをセットバックしたことによるものか。

オブザーバー：

- ・これまでは飲食・物販店舗前の庇がある通路も賑わい広場の面積として含めていたが、この部分はイベント時に使用しないと思われることから、今回から面積に含めない扱いとしている。

部会員：

- ・イベント時に使用する机や椅子は、2階倉庫に保管するのか。

オブザーバー：

- ・具体的には決まっていないが、使用頻度の高い机や椅子は、ホール1階東側の倉庫に収納できるとよいと思う。ステージ等の収納については、今後検討していきたい。

事務局：

- ・これをもって、すべての意見をいただいたものとし、基本設計に反映していきたい。

#### 4 まちづくり勉強会

事務局：

- ・これまで川島先生に芦原温泉駅周辺に賑わいを創出するにあたり、何か良い事例がないか相談してきた。そして、今回、勉強会という形で事例紹介をしていただけたこととなった。川島先生、よろしくお願いします。

部会員（福井工業大学教授）：

- ・配付資料「新しい「公共」とまちの未来」を基に説明。要旨は以下のとおり。
- ・本日のテーマは、「再開発とリノベーション建築」と「新しい公共」（公民連携）の可能性」の2つである。

(再開発とリノベーション建築について)

- ・「再開発」は「人工的に都市をつくる」ということの一つである。しかしながら、ワクワクする、イキイキとしたまちの体験は、人工的につくられたまちではほぼ成功しない。予期せぬ発見、偶然の出会い、思わぬ経験から生まれるものである。人間が人工的につくった都市はことごとく失敗している。いくら計画的にうまくやったつもりでも、人間にとってはあまり幸せなまちにならないということがある。
- ・C. アレグザンダーが提唱した「都市はツリーではない」によると、機能がきっちりと整理されたまちをツリー構造、長い年月を経てつくり上げられたまちをセミラティス構造として説明している。人間が人工的につくったまちは、ツリー構造で、住宅のエリア、

お店のエリアといった感じにあまりにも整理されすぎていて偶然の出会いということが起こらない。一方で、長い年月を経てつくられてきたまちは、セミラティス構造で、機能が入り組んで複雑に重なり合っただけの状態、機能は合理的とはいえないが、偶然の出会いが起こりやすい。思わぬ路地裏に入ったら、偶然今まで気付かなかったお店を発見して、それがまちの楽しみになる、意外なところで意外な人と出会って新しい人との出会いが生まれるというようなことが起こるといえる理論である。

- ・今回、芦原温泉駅前の再開発といった場合に、市民の立場で何ができるかということ考えたときに、周りにすでに古い建物が建っているため、建物の歴史を背景にしたリノベーション建築をやっていく。これは、大きなお金がかかるというわけではないため、個人の財力でもでき得る。つまり、再開発の部分は、市（官）が行っているが、リノベーション建築の部分を民の力でやっていくということである。
- ・民の力でリノベーションした事例として、FLAT KITCHEN（福井市呉服町／カフェ&バル）、SAMMIE'S（福井市日之出／ゲストハウス）、CRAFT BRIDGE（福井市浜町／複合施設ビル）を紹介。
- ・（仮称）春山スタジオ（福井市春山）は、私が購入した物件でリノベーションを手掛けているところである。ここに住むわけではなくて、まちの人たちと活動する拠点にしたいと考えている。
- ・福井市では、エリアリノベーションのスクールを行っており、今回私も講師として参加する。あわらでも、興味のある方やリノベーションのやり方がわからないといった方に、簡単なワークショップなどを通して教えることもできるので、参考にしてほしい。

#### （「新しい公共」（公民連携）の可能性について）

- ・新しい公共の在り方は、民間主導で、その動きを官がサポートするという形である。よくあるのが、市民が市役所にあれもこれもやってくれと期待する状況である。そうではなくて、市民が自分たちの力でできることややりたいことを、市役所が法律に反するのでできないと言うのではなくて、そこをできるようにサポートしていく動きが全国的に展開されている。その事例を4つ紹介する。

#### ● 「連尺通りの社会実験（おとがわプロジェクトの一環）」（愛知県岡崎市）

<http://otogawa.jp/know/goodquruwa1118/>

- ・閑散とした古い商店街で、人気のない連尺通りの歩道を活用して賑わいをつくりたいという一市民（ヨソモノ）の発想から生まれたプロジェクト。商店街のお店や住宅から約1mだけ歩道にその中の領域を染み出すようなことを、期間限定で社会実験として行った。
- ・路上で個人が何かやろうとすると、公共空間を管理する行政の許可が必要である。そんな行政のルールを一時的に緩和し、歩道や軒下、駐車場等の空間を活用して飲食ブースや古書店が出店し、期間限定のお祭りのような感じで行い、市民が楽しんで大変賑わったという事例である。
- ・岡崎市では、これを成功事例として、康生通りでも同じように社会実験として行った。これを仕掛けたのは、まちづくり岡崎（まちづくり会社）である。民間が動いて、市役所がサポートする、まさに公民連携の形でまちづくりが進められている。こういう動き

を見て、周りの人たちも自分たちの家の前でもやってみたいと動き出すことで、まち全体が活性化していくという事例を紹介した。

●「ホシノタニ団地」(神奈川県座間市)

<https://www.odakyu-fudosan.co.jp/sumai/mansion/hoshinotani/index.html>

- ・リノベーションによる団地再生の成功事例。マンションの外にある空間(通常庭があるような場所)を皆が集まれるような形にお洒落にリノベーションを行った。団地の周辺はマンションや一戸建て住宅が建っているエリアだが、団地で面白いことが起こるということで、周辺から人が集まってお祭りやイベントをするようになり、団地自体がよみがえった。
- ・新築するというと再開発のように大掛かりなことになるが、元々ある建物を生かしてリノベーションしていくので、そんなに大きな費用を掛けずにまちを大きく変えることができる事例ということで参考にしてほしい。

●「紫波町オガール」(岩手県紫波町)

<http://ogal.info/>

- ・あわら市と同規模の人口の紫波町で行われた事例である。オガールタウンの真ん中に役場庁舎があり、その周りに公園や図書館を整備したわけである。図書館は、公共建築の中でも最も開かれた場所である。美術館や病院も公共建築であるが、それぞれ目的がないかに行かない場所である。誰もが自由に入出入りできて、どれだけ長い時間いてもよい場所が図書館である。この図書館の公共性を活かして、公園と一体化させて計画していることに、成功の秘訣がある。公園は、公園法により様々な制約が設けられているのが一般的だが、図書館との敷地の区別がつかない感じになっていて、公園の中でイベントを行って飲食をするなど、広く公園が使われるような仕組みづくりが行われている。
- ・オガールが目指しているものは、都市と農村の新たな結びつきを創造するというところだが、このようなコンセプトでまちづくりを行っているところは珍しい。都市は都市、農村は農村といった形でまちづくりを頑張っているところはたくさんあるが、都市と農村の関係性を、オガールタウンを拠点として農村までを視野に入れて広がりを持ってつくっていくというコンセプトが斬新である。全国からも視察が殺到している。

●「南池袋公園」(東京都豊島区)

<https://www.haconiwa-mag.com/life/2016/05/minamiikebukuropark/>

- ・公園の中にカフェをつかって成功した事例である。公園法では公園にカフェをつくることは認めていないが、法律の隙間を塗って違反をせずに実現したもの。様々な問題があったが、東京都公園協会の職員に相談し、その方が役所に掛け合ってくれて実現することができた。
- ・公園に背を向けて敷地を別にして立地しているカフェはよくあるが、カフェが公園の方を向いて開かれているという点が工夫されている。地域住民が安心して集える都市のオアシス空間として認識され、結婚式なども行われている。

(まとめ)

- ・今ほど説明したことは、「道路」、「団地」、「公園」という行政が管理している公共空間を活かしてまちづくりを行っている先進事例である。その手法の一つがリノベーション

であり参考にしていただきたいが、決して真似をするというわけではなくて、あわら流の公共空間の使い方を考えていく中で、うまく活用されていない公共空間を市民の力でどう新しいまちに変えていけるかという視点で部会員の皆さんの力を発揮していただきたいし、市職員も単に規制するのではなくて応援する側に回ってもらいたいと思う。以上で、話を終わらせていただく。

事務局：

- ・川島先生のお話を聞いて、部会員の皆さんからご質問やご意見をお願いしたい。

部会員：

- ・連尺通りの社会実験について、通常の物販だけではなくて、飲食も行っているのか。

部会員（福井工業大学教授）：

- ・飲食も行っている。飲食の集客力は大きいし、滞在時間を長くする効果も大きい。その通りで商売をされている方がそのまま歩道に染み出してやっているケースや、駐車場等の空きスペースを活かして、既存の飲食店舗を誘致するようなことも行っている。

部会員：

- ・新富商店街の前は県道なので、県への働きかけも必要であろう。駅周辺整備の一環として、無電柱化事業も行っているので、商店街の繁栄とともに歩道の活用の検討も行っていけたらよいと思う。

部会員（福井工業大学教授）：

- ・この取組は、リノベーションをしたり何かを建てるわけではないので、比較的ハードルは低いと思う。是非検討していただきたい。

部会員：

- ・オガールというネーミングが興味深かった。
- ・FLAT KITCHEN は立ち上げ当初から話を聞いていたが、学生やアーティストの力は大事だと感じた。
- ・自分が美大時代に、学校の近くに少年院があって、殺伐としたコンクリートの壁に一人あたり何メートルずつ担当して自由に絵を描いて、その通りが明るくなった。あわらでも、駅前通りの西郡鬼瓦工房のシャッターに福井工業大学の学生がペイントしていて、そのような取組もよいと思った。
- ・紹介していただいた事例をみると、自分たちはどうしても採算を考慮してしまい、真似できないと感じた。

部会員（福井工業大学教授）：

- ・採算ではないところからスタートした方が、結果的に採算につながっているように思う。目先の損得で商売をしようとする、二の足を踏んでしまうことがある。
- ・紫波町の例でいうと、オガールをつくる前提でオガール紫波株式会社を設立し、このまちづくり会社にオガールの運営を任せている。まちづくりのいろんなことを担っているまちづくり会社は多いが、ピンポイントに目的を定めてまちづくり会社を立ち上げたところが後の成功につながったのだと思う。

部会員：

- ・家の近くに図書館と神社があって、昔は神社にもよく人が集まっていた。市民の方は、賑わいを求めているのか、静観を望んでいるのか、考えることがある。他県の観光に行

ったときに、至るところに椅子が置いてあって、誰もが一服できるような環境でいいと感じた。そこにテントがあったりすると、相反するかもしれないが賑わいと静観が生まれるのではないかと思った。

部会員（福井工業大学教授）：

- ・図書館は、ブックカフェのように運営していくやり方が新しいスタンダードになってきている。図書館は老若男女が集まる場所であり、そこにさらに刺激を与えるような仕掛けをすると、図書館を起点にまちが生き返るようなことになる。一昔前の図書館は、騒いではいけないといった感じで私語厳禁だったが、今は逆に私語してもよいし、勉強会をしたりすることも許可しているところもある。そうしたところは、静かに本を読みたい人のための専用ブースを設けることで、広く人を呼び込む仕組みづくりをしている。

部会員：

- ・地元の豊橋市では、1週間歩行者天国にして屋台が立ち並んで賑わうという取組を行っていて、子どもながらに楽しかった思い出がある。金津祭も同じような感じで賑わっていていいと思う。休日の3日間だけではなく、平日も含めてもう少し長い期間でできるとよいと思った。と同時に、賑わい広場でもイベントを行うと相乗効果で盛り上がっていくと思う。

部会員：

- ・それほど予算をかけずにできる取組として、大変勉強になった。考え方としては、シビックプライドで市民が住みたいまちを市民自身がどうつくっていくかということが大事だと思う。市では、まち・むらときめきプランを策定し、各地区が独自価値をどのように創造していくかということに当たると思う。こういったお話を広く市民の方に聞いてもらえると思うし、事例を知って自分たちと同規模のまちでもやっているということが前進する励みやきっかけになると思う。

部会員（福井工業大学教授）：

- ・日本全体の人口が減少しているので、市町で人口の奪い合いをしても意味がないと思う。最終的な目標は、住んでいる人たちが幸せになれるかどうかなので、こういうことをやりながら住んでいて最高だと思えたらそれで十分成功だと思う。これが、人口減少局面に入った中で、地方都市が目指すべき姿だと思う。

部会員：

- ・ポートランドに視察に行ったときに、自分たちのまちは自分たちでつくるという雰囲気を感じた。

部会員（福井工業大学教授）：

- ・今の観光は、観光地をピンポイントで見に来るというよりは、そこの人たちがどんな暮らしをしているのかを見に来る時代である。そういった意味では、あわらにしかない暮らしを全国の人たちがおもしろがって見に来るということが、本来のあわらの観光になるのだと思う。「ああ、あわら贅沢。」のステートメントにもあるように、あわらならではの素晴らしさや、あわらの人たちがどれだけ幸せに暮らしているかを見に来てほしいということになれば、十分成功といえる。そのためには、役所が全部つくっていくということではなく、あわらの人たちが自分たちで幸せな暮らしをつくっていかなければ

ならない。

部会員：

- ・あわら温泉の芦湯も誰でも無料で使える場所という意味で、図書館と同じだと思う。しかしながら、湯のまち広場周辺も含めて平日の昼間が閑散としているので、もっと活かす方法がないか考える必要がある。月1回程度、定期的なマルシェ等を開催しているが、昼間やってもあまり人がいないので、今日の話聞いて試験的にでも夜のマルシェをした方がよいのではないかと思った。

部会員：

- ・農村部でも空き家が増えているので、リノベーション建築を学んでみたいと思っている人は多いと思う。昔ながらの家にそのまま住みたいと思う人は少ないと思うし、人が集まるような建築でリノベーションできるとよいと思った。エリアリノベーションが、都市部だけでなく、農村部にも広がっていくとよいと思う。

部会員（福井工業大学教授）：

- ・関心があるのであれば、先ほど説明したリノベーションスクールの受講をお奨めする。役所の方も受講しているので、ご検討いただければ幸いである。クマゴローカフェ（福井市）は、実際の空き物件を対象に、受講者がその物件をどうすればその地域を盛り上げることができるかを考え、実際に事業計画を作り、オーナーさんに提案し、出来上がった事例である。

部会員：

- ・先日、京都外国語大学の学生が、インターンシップであわらのまちを回ってどうしたら活性化するのかということを検討されていた。話を聞いていると、お金のことを度外視して、こんなことをしたら盛り上がるのではないかという自由な発想が優先されていて、自分とは考え方の順序が違ってはっとさせられた。お金があるからこんなことをやろうではなくて、こんなことをしたらあわらが活性化するというような発想が重要なのであろう。
- ・先ほど部会員の話にもあったが、夜の賑わい創出を目的に、これまで女性を中心に「あわら宵市～ピンクフェスタ～」を年2回開催してきた。通りで商売している人に自分の店の前でモノを出してくれることを期待したり、周りにも出店の声掛けをしたが、なかなか協力が得られなくて、実行委員会メンバーが疲れてしまって今休憩している。

部会員：

- ・紹介いただいた福井市の事例にはだいたい関わってきたが、いざ自分でやろうと思うと相当の覚悟が必要で葛藤している。あわら市でやるのであれば、農村とまちをつなげるようなことをやってみたいと思っている。例えば、駅前にできる施設とそこから農村へ発信するグリーンツーリズムで、実際に農家と消費者が顔を合わすことでお互いの喜びや感動が生まれるようなことをやってみたい。農家の方が、消費者の感動する姿を見て楽しくて、次は駅前に出て売ってみようというところにつながるとよいと思う。

部会長：

- ・連尺通りの社会実験の事例は、小倉のまちづくりをされている方からも同じような話を聞いた。その方は、商店街の通りで市やフリーマーケット等を行いやすくするために、道路の管理を行政からある程度任せてもらうところまで漕ぎ着けたと話していた。湯～

わく Dori でも歩道で朝市をやろうとして道路占用許可が下りなかったような課題もあったが、もうひと頑張りあったら別のやり方で実現できたのではないかと感じた。

- ・湯のまち広場整備前に夕市を行っていたことがあったが、そのときに継続することの難しさを痛感した。継続する上で、すべてボランティアでやりきるという時代も終わったと思うし、ある程度お金が回っているような仕組みづくりを同時に進めていかないとはいけないと思う。気持ちの面でも、立ち上げた人が最先端で突っ走っていても息が切れてしまう。自分が関わった例でいうと、屋台村湯けむり横丁では現場で生業をしている店主会にある程度運営を任せ、我々運営者（あわら湯けむり創生塾）がすべてを決めるわけではないという仕組みや、a キューブカフェでも店長のやりたいスタイルでやってもらうなど、現場のことは現場でやっている人に考えてやってもらうという仕組みづくりが大切だと思う。関わっている人たちが最後には自分もやってみようと思うところまでいけると、興味のある人を実際のプレーヤーにまで押し上げることにつながるのだと思う。

部会員（福井工業大学教授）：

- ・出来上がったものを手伝ってほしいというより、こんなことをやるから一緒にやろうと行った方が、全員がプレーヤーとして当事者意識を持って気持ちが高まっていくものである。プレーヤーを増やすためには、企画段階から参加してもらうことを念頭に置くことよいと思う。

部会員：

- ・今の話を聞いて、福井県立大学の生物資源開発研究センター（あわら市）に来春、創造農学科が新設されるので、農家として連携できるように仕掛けていきたいと思った。

部会員（福井工業大学教授）：

- ・福井工業大学にもあわらキャンパスがあるので、併せて声掛けしてくれたら幸いである。

オブザーバー：

- ・道路については、平成 28 年度に国土交通省が歩道の道路空間を民間ビジネスの場所として活用するよう推進して、オープンカフェや市場、コミュニティサイクル等が自由にできるように法制度が整備された。姫路では、歩道を整備する前にオープンカフェの社会実験をして、歩道のこの部分をウッドデッキにしよう、ここに植栽を置こうなどと、オープンカフェを見据えた歩道整備を行っている。
- ・公園については、大津にあるなぎさ公園の「なぎさのテラス」は、公園の中に4つのカフェを整備し、地域マネジメント組織が一括管理している。現在は、都市緑地法の改正によって、P a r k - P F I という手法が創設され、民間事業者が公園内でカフェを行うことが認められているので、チャンスは広がってきている。
- ・部会長が言っていたように、市民だけでやっても長続きせずに息が切れてしまう。リノベーションをするにしても、最低限家賃が払えるまでの採算が取れることや、飲食を入れるなど、収益が見込めるやり方でやらないと、建物を維持することはできない。また、これを公共が支えるやり方として、まちづくり会社がある。紫波町は、研究に研究を重ねて、補助金等をうまく活用して実現した成功事例といえる。

市長：

- ・前半の西口駅前広場の協議に関連して、今度はここをどう運営していくのかについて、

新たな組織を立ち上げる必要があると考えている。その際、皆さんのお力をお貸しいただきたいので、引き続きよろしくお願ひしたい。

部会員：

- ・賑わいホール1階のATMの位置がトイレの近くにあるが、防犯上危険ではないか。

事務局：

- ・その点も含めて検討し、基本設計に反映していきたい。

## 5 その他

事務局：

- ・次回の部会からは、西口駅前広場の運営組織を中心に協議していきたいと考えている。開催時期は未定で、12月または来年1月頃に開催できればと思っている。調整の上、案内させていただくので、よろしくお願ひしたい。

## 6 閉会

事務局：

- ・6月から本日までタイトな日程ではあったが、西口駅前広場の機能性やプレーヤーとしての利活用策について、慎重にご審議いただき、また貴重なご意見を賜り感謝する。今後は、いただいたご意見を基本設計に反映する作業に入っていく。
- ・先ほども申し上げたが、次回以降は運営組織等の協議を行っていきたい。今後ともよろしくお願ひしたい。